北海学園大学附属図書館報

図書館だより

1993.7.10

第15巻2号

通巻126号

Bulletin of the Hokkai Gakuen University Library

比較文化のキー・ワード

高久眞一

聖書は宇宙創造の神話から始まる主として人間の歴史に関わるぼう大な量の記述であるが、その大百科事典的書物の中に全く欠けた単語がままある。有るものに注目するのは容易で、大事なことだが、時には無いものにも注意を向けることは案外面白く、事の真相を裏から垣間見せてくれることがある。近代科学とか技術に関する言葉が聖書に記されていないなどという無意味なことを言うのではない。実は、普通の文化なら必ず持っていそうな、生活の基本に関わる言葉の一つ、つまり「橋」という単語が聖書のどこを探しても見当たらないのである。

ヨルダン川の流域で展開されたヘブライ人の移動、定着、他民族との交流あるいは戦いの記録に「橋」が全く無いというのは、考えてみると不思議である。アブラムがカルデヤからカナンの地へ来た時からこのかた、ヨルダン川は幾度彼らの歴史の舞台となったことか。族長ヤコブが兄エサウに会うべく、その川を渡った時にも、橋があったとは記されていない。時代が下って、ヨシュアがエリコ攻略のため軍を進めた時も、川の流れは奇蹟的にせき止められ、橋無しで渡ることが出来たという。想えば、モーセに率いられての紅海の徒渉という奇蹟が彼らの原体験であったのか、自分たちの前にある水は、海であれ川であれ、結局は行く手を阻むことにはならないのだという信念を生んだと見える。箱舟を造ったノアの子孫にとって、橋をかけるなどは造作のないことであった筈だ。バビロニア捕囚期のあとでも橋が記述されていないのを見ると、ユウフラテスにも橋がかかっていなかったのであろうか。

他方、水という障害を水平的に解決するものは考えつかなかったが、空間という異質なものを垂直的に解決する物への言及はしている。ヤコブの梯子がそれで、夢の中ではあっても、着想されていることに変わりはない。しかし、その着想はついぞ横倒しになって川の上に及ぶことはなかった。

橋を欠いた文化と凡そ対照的なのが古代ローマのそれで、ローマ人は橋をかけることには天才的と言ってよく、川越えはおろか、水道までもが地上で橋の形をとった。そのローマに四世紀のこと、皇帝コンスタンチヌス一世がキリスト教を導入した。橋という概念を全く欠いた精神文化の粋が、こともあろうに、橋造りの名手をもって鳴る国家の中枢に据えられ、国教となったキリスト教の最高権威者たる教皇の正式の呼称が「ポンティフェクス・マクシムス」つまり「最高の橋大工」だとされた。大工の子であったイエスにあやかろうというのでもあろうか。いずれにしても、聖書の世界とは異質の呼称であり、古代ユダヤ文化がギリシア・ローマ文化と融合したことを象徴する呼称と言えよう。それは、神と人、キリストと人との間の深淵に橋渡しをする人、さらに地上と天上との間に橋渡しをする役職の意であろう。

（たかく　しんいち　　人文学部教授）

ディミートル・ディーモフ著『タバコ』松永緑彌訳

—「本との出会い」に思うこと—

和泉田　正　宏

6月初旬のある日の午後、私はいつものように図書館3階閲覧室の中央にある書架の間を、「何か面白いものはないか？」と思いながらぶらついていた。これは書店めぐりをするときと同じ癖のようなもので、並んでいる本の分野とか主題には関係なく、日頃から頭の隅々に張りめぐらせてある幾本かの好奇心のアンテナにヒッかかるものを探している、永年にわたり身についた習慣であった。

そのときである。私の足は、「東欧の文学　タバコ」という一風変った書名の2冊物の本の前でとまり、989.1という分類番号に気がついた。かつて図書館で分類業務に携わった頃のことを思いだし、ブルガリア文学ではなかろうかと推量した。手にとってみると、やはりそうであった。現代小説である。これが、今回採りあげる本と私の出会いである。

『タバコ』(原題TIOTIOHチュチュン)は、第2次世界大戦後のブルガリア文学を代表する作家の一人であるD.ディーモフ(Dimiter Dimov、1909.6.25－1966.4.1)の長編小説である。「訳者あとがき」によれば、ディーモフはバルカン山脈の北側にあるドナウ川の支流オスム川の町ロヴェチで、陸軍将校トードルと有名なマケドニアの革命家ヤーネ・サンダンスキーの姪ヴェセリーナの間に生まれた。首都ソフィアで中等教育を受けたディーモフは、その頃からフランス語とスペイン語を真剣に学び、絵をかくのが上手で、動物学、化学、物理学にも興味をもち、原語のフランス語でメリメ、モーパッサン、バルザック、ユーゴーを読んだほか、チェーホフ、ドストエフスキー、ツルゲーネフなどの作品を耽読した。

1934年にソフィア大学獣医学部を卒業したディーモフは地区獣医に従事したあと、1939年には家畜生理学講座の助手となり、1943年からスペインのマドリッドに1年間留学、1953年には家畜解剖学講座の教授となった。

一方、作家活動としては『ベンツ中尉』(1938)、『セヴァストポリ、1913』(1940)、『呪われたる魂』(1945)などを発表したあと、1951年には『タバコ』を公刊した。これは読者の間に大きな反響を

A・V・ビデオ　主なテープのリスト　その2

THE STORY OF ENGLISH	1— 9	ROBERT MACNEIL
たのしいドイツ語		塩谷　節
[NHK] THE BBC SHAKESPERE	8 vols	日本放送協会
[NHK] 地球大紀行	1—12	日本放送協会
[NHK] 大黄河—日中協同取材	1—10	日本放送協会
[NHK] 電子立国日本の自叙伝	1— 4	日本放送協会
[NHK] 映像でつづる昭和の記録	1—32	日本放送協会
[NHK] 銀河宇宙オデッセイ	1— 7	日本放送出版協会
[NHK] 北極圏	1— 5	日本放送協会
[NHK] 驚異の小宇宙　人体	1— 6	日本放送協会
[NHK] 日曜美術館—日本の美—	1— 3	日本放送協会
[NHK] 21世紀日本企業はどうなる	1— 6	NHKエンタープライズ
[NHK] 日本の美	2 vols	日本放送協会

呼び、ソビエトのレーニン文学賞にあたるブルガリアのディミトロフ文学賞の第一席に選ばれた。

さて『タバコ』の舞台は、バルカン半島の農業国ブルガリアとギリシア東部の町カヴァラを中心に展開し、時代背景としては第2次世界大戦の勃発にともない、ブルガリアがドイツ枢軸側に加わった1941年からドイツ降伏の1945年5月までの約4年間である。当時、タバコはブルガリアの全輸出額の約20%（最大の輸出品目）を占め、タバコ輸出では世界一ということもあり、タバコ産業は資本主義的関係がもっとも典型的に発達した部門であった。そして、この産業構造と国家財政の大きな部分を支えていたのが、最大のタバコ輸出株式会社「ニコチアナ」であり、その倉庫で苛酷で劣悪な労働条件で働く、全国で3万とも4万ともいわれた貧しい季節制のタバコ加工労働者たちであった。

第一部は、貧しいラテン語教師の次男から「ニコチアナ」の社長に伸し上がったボリスが、ドイツ軍の進駐下でドイツ人タバコ業者、国会議員、市長らを利用して事業を拡大して膨大な利益を蓄積していく過程と、ブルガリア人、ギリシア人、トルコ人、アルメニア人などで構成されるタバコ加工労働者の悲惨な日常生活が克明に書かれている。

第二部は、熱帯性マラリアによるボリスの死、共産主義指導者となったボリスの兄パーヴェルが率いるパルチザンとドイツ軍の激しい戦闘のなかで、武器の絶対的不足のために次々に倒れていく農民出身パルチザン兵士たちの死にざまが中心になり、そして共産主義者と左派の農民同盟員を核とする「祖国戦線」の成立と新しい国家の誕生で終わっている。

2段組みで1,000ページを越える『タバコ』を読み終えた私は、正直いって、かなりの疲労感を覚えた。第2次世界大戦前後の東欧諸国は、そのほとんどがブルガリアと同じ建国の道をたどってきている。私は『タバコ』を通して、「本との出会い」が生みだす新しい世界への回帰とともに、つぎのような感慨にふけったのである。

私たちはベルリンの壁の取り壊し、東西ドイツの統一、ソ連邦の解体と経済破綻、旧ユーゴスラヴィアの分裂と泥沼の内戦を目のあたりにしている。

ブルガリアはわが国ではあまり知られていないが、北はドナウ川をはさんでルーマニア、西はセルビアとマケドニア、南はギリシアとトルコにかこまれ、東は黒海に面するローマ時代からの遺跡の宝庫である。さらにギリシアとトルコの文化の洗礼をうけた諸文明のるつぼ・ブルガリアは東欧諸国のなかでも旧ソ連とは結びつきが強いといわれる。1991年の総選挙で一党独裁が終わり、社会党（旧共産党）が野党に転落、共産主義と旧体制の一掃をスローガンとする民主勢力同盟（UDF）が第一党のブルガリアは、これからどのような道を歩むことになるのだろうか。

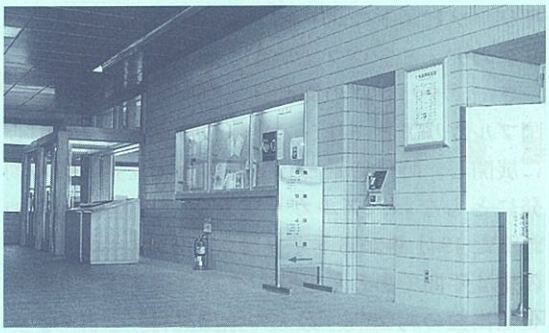
（いずみだ　まさひろ　企画調査室長）

●工学部所蔵分

[NHK] シルクロード	1— 2	日本放送協会
日本—その姿と心		新日本製鉄㈱
日本—その姿と心　英語版		新日本製鉄㈱
核戦争後の地球	2 vols	日本放送協会
KAJIMA VIDEO PARK	45 vols	鹿島出版会
[地域科学] まちづくり映像シリーズ	1—12	地域科学研究会
普請往来　建築家		村野藤吾生誕百年記念会企画
初心者のための　現代制御理論ビデオ講座	8 vols	計測自動制御学会
半導体教育のビデオライブラリ	2 vols	サイエンスフォーラム
コンピュータ教材　21	5 vols	日立製作所
情報処理システム	4 vols	日刊工業新聞社
新・大2種情報処理技術者試験講座	3— 5	日刊工業新聞社
おそすぎたlipsの復権	2 vols	リーダース・ワークショップ
新・第2種情報処理技術者試験講座	2 vols	日本コンピューター㈱

新着図書 ――経済学部

情報経済のマクロ分析　広松毅、大平号声著　1990
情報過多社会への挑戦　情報（メディア・環境・活動）論　川勝久著　1992
読売 vs TBS　マスコミ大戦争　木村愛二著　1992
本田宗一郎グラフィティ夢の轍　池田政次郎文　プレジデント社書籍編集部編　1992
君主制国家論の歴史的系譜　赤沢計真著　1992
PKO 派兵　分析と資料　剣持一巳著　1992
企業倒産法の理論と全書式　今中利昭、河端幸弘編著　1992
豊かな時代の暮らしと貯蓄　貯蓄経済研究センター編　1989
世界経済史入門　欧米とアジア　長岡新吉［ほか］編著　1992
入門日本経済　これからの経済を考える　金森久雄著　1991
日本の企業と産業組織　三輪芳朗著　1990
日本の経済　館竜一郎著　1991
北海道経済図説　大沼盛男［ほか］編　1990
アメリカ経済指標入門　基礎テキスト　小峰隆夫編著　1990
現代経済政策入門　長谷川啓之編著　1991
要点・経営学　内山利男著　1991
Human capitalism　国境を越える日本型経済　ロバート・S.オザキ著　1992
日本の中小企業　土屋守章、三輪芳朗編　1989
地域中小企業の構造調整　大都市工業と地方工業　関満博著　1991
(Q＆A わかりやすい) ODA　その仕組みと役割　久保田勇夫編　1992
経営学　理論と体系　大月博司、高橋正泰共著　1986
日本の六大企業集団　その組織と行動　公正取引委員会事務局編　1992
日本の企業会計　醍醐聡著　1990
日本の金融変動と金融政策　構造変化の解明　堀江康熙、浪花貞夫著　1990
金融自由と公的金融　吉野直行、古川彰編著　1991
短期金融市場　日米欧の比較とわが国の課題　沢山弘編著　1990
株式・株券の法律実務　作成・保管から移転・流通のすべて　東洋信託銀行証券代行部編　1992
工業化と金融システム　寺西重郎著　1991
富の興亡　円とドルの歴史　ポール・ボルカー、行天豊雄［著］　1992
貿易企業の為替リスク管理　中条誠一著　1990
保険の社会学　医療・くらし・原発・戦争　本間照光編　1992


図書館入口

太陽と月と図書館と

'92 年度は開館（新築後）6 年目。
配本のプリズムを通してみた図書館模様。
90,426 冊（本館の数字）
これが開架にかかわる配本総数。7 万冊の開架冊数の回転率は 129%。
階層別では
　専門フロア 2 階　53,559 冊（59%）
　教養フロア 3 階　36,867 冊（41%）
昼夜別では
　昼間　50,967 冊（56%）
　夜間　39,459 冊（44%）
利用別では
　貸出　12,203 冊（14%）
　館内（推定閲覧）　78,223 冊（86%）

本学全体の貸出冊数は **30,576** 冊。
これを現代版「アレキサンドリア図書館」と言われる**金沢工大ライブラリーセンター**の 15 万冊と較べると 3 分の 1。蔵書に対する回転率で、本学の0.5%に対して同センターは46%。（『世界』

図書館掲示板

法学部 —— 新着図書

自由民主主義体制分析　多元主義・コーポラティズム・デュアリズム　石田徹著　1992

情報公開制の現実　松尾直著　1992

宗教から読む国際政治　日本経済新聞社編　1992

法の修練　ロード・デニング著　1993

現代憲法の諸相—高柳信一先生古稀記念論集—　奥平康弘編著　1992

新憲法講話　長谷川正安著　1992

イギリス信託法原理の研究　F.W.メイトランドの所説を通して　森泉章編著　1992

公開会社と閉鎖会社の法理　酒巻俊雄先生還暦記念　石山卓磨、上村達男編集　1992

公図の研究　藤原勇喜著　1991

世界の家族法　黒木三郎監修　1991

会社法の現代的課題　加美和照著　1991

改正会社法　大谷禎男著　1991

株式総会の法理論　末永敏和著　1991

近代刑事法の理念と現実—フランス革命二百年を機に柏木千秋先生喜寿記念論文集—　澤登佳人［ほか］編　1991

刑事総論　大越義久著　1991

違法性の本質と行為無価値　吉田宣之著　1992

思想的犯罪に對する研究　新興出版社　1991

現代社会と実質的犯罪論　前田雅英著　1992

紛争と裁判の法社会学　棚瀬孝雄著　1992

言語行為としての判決　法的自己組織性理論　小畑清剛著　1991

合意書・示談書・協定書等モデル文例集　合意書・示談書等文例研究会編　1990

民事訴訟の理論と実践—伊東乾教授の古稀記念論文集—「民事訴訟の理論と実践」刊行委員会編　1991

民事証拠法研究—証拠の収集・提出と証明責任—　春日偉知郎著　1991

刑事訴訟法　上口裕［ほか］著　1991

刑事裁判の復興—石松竹雄判事退官記念論文集—　守屋克彦、光藤景皎編

ドイツ民事訴訟の理論と実務　P.アーレンス著　1991

国際取引法の理論　奥田安弘著　1992

国際私法研究　折茂豊著　1992

解説流通・取引慣行に関する独占禁止法ガイドライン　山田昭雄［ほか］編著　1991

株券保管振替の実務　河本一郎［ほか］著　1991

社会保障の新しい理論を求めて　隅谷三喜男編　1991

英米回顧法制の研究　小宮文人著　1992

国際公法　A.ペレ著　1992

はじめての国際法　畝村繁著　1992

戦争・テロ・拷問と国際法　A.カッセーゼ著　1992

世界100カ国の法人税　中元文徳編著　1992

——利用のプリズム

7月号、〈検証〉大学の現在⑤－図書館へ行こう」)。すべて、電算システムなしでは出来ない。

さぞかし、館内利用は12階総開架の同センターのことすさまじいと思い問い合わせてみると、意外にも「学生が収めています」とのこと。「なぜ」の問いに「棚指定番号を分数標記に代えていて、その棚ならどこに収めようと自由」。なるほどこれなら館員をわずらわせることもない。

実は、この「柔思考」を編み出したのは元国立国会図書館副館長の故酒井館長。理念と実務を見事調和した先見性にただ感嘆するのみ。

同センターは夜10時まで開館。4時30分から閉館まで3人の学生アルバイトが館員1人につく。1日平均1,000冊の配本。

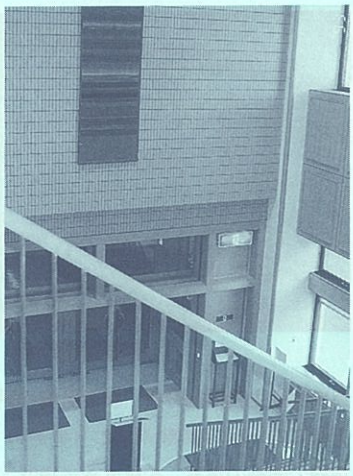
貸出冊数の制限はなく、1人で年間1,000冊も借りた学生さんもいたという。

電話のむこう、北陸路の同センターの山口司書の声はさわやかな夏の知求の風のようだった。

(K)

新着図書 ——人文学部

イギリスはおいしい　林望著　1991
私のアメリカ家庭料理　長島亜希子著　1991
日本の子育て・アメリカの子育て　勝浦クック範子著　1991
二〇一〇年の北海道—ゆとり時代を地球へ—　加藤寛［ほか］著　1992
ニューヨーク獣医物語　シティ・ペットの冒険　スティーブン・クリトシック著　1990
北のさかな物語　門脇啓二著　1991
ニューヨーク・デリ・　ニューヨーカーの美味しい生活　柴田書店編　1991
データベースマーケティングの戦略と戦術　いま「個客」にどう仕掛けるか　荒川圭基著　1991
大激震のアメリカ流通業　〝ゴリラ〟と〝ゲリラ〟の出現　池本正義著　1991
アメリカ貿易は公正か　知られざる保護主義の全貌　ジェームズ・ボバード著　1992
昭和の文化遺産　1—10　ぎょうせい　1990—1991
イタリア美術史　東洋から見た西洋美術の中心　田中英道著　1990
新芸術論システム　1—20　ゆまに書房　1991
ポンペイの壁画1—2　ヴェスヴィオ山噴火で埋没した地域の壁画集成　ジュゼッピーナ・チェルッリ・イレッリ［ほか］編　1991
ヨーロッパ音楽の旅物語　井上宗和、芳賀幸子著　1990
音楽風景　ロックというアメリカの出来事　片岡義男著　1991


ホールＩＦ

カーク・ダグラス自伝　くず屋の息子　上下　金丸美南子訳　1989
ハリウッド・ビジネスの内幕　映像ソフト王国の全貌　筈見有弘著　1991
ビリー・ワイルダー・イン・ハリウッド　モーリス・ゾロトウ著　1992
スポーツビズ　スポーツ界のマネー事情　スティーヴン・アリス著　1992
ゲイリー・プレイヤー　勝利者への条件　ゲイリー・プレイヤー、マイケル・マクドネル著　1992
平安時代語新論　築島裕著　1991
現代語の展開　佐伯哲夫著　1989
すぐに役立つ国語表現　国語表現研究会編　1991
頭と心と体を使う英語の学び方　近江誠著　1989
カタカナ語を英語にする辞典　例文中心和製語から通じる英語へ　丸山孝男［ほか］編著　1992

気楽に読もう——①

『帰還 —— ゲド戦記最後の書』（「ゲド戦記」第4巻）

ル＝グウィン作
清水真砂子訳（岩波書店）

18年前、あなたは何をしていましたか？　その時の自分のことを覚えていますか？

『ゲド戦記』第4巻は、第3巻が出たあと、実に18年ぶりで発刊されました。第1刊「影との戦い」、第2巻「こわれた腕環」、第3巻「さいはての島へ」この3冊で物語は完結したかのようでした。まさか、まさかの第4巻「帰還 —— ゲド戦記最後の書 ——」の登場です。

なあんだ、児童書かと思う人も多いでしょう。でもちょっと待って！この本は、むかし子供だった人達向けの児童書でもあるのです。この本には、フェミニズムの問題、男の占有物としての魔法(知)、次代への継承等々、読みごたえのあるテーマが含まれています。大人になって読んでこそ面白い本です。

あなたの中のゲドを、そしてテナーを捜して下さい。　(O)

人文学部購入雑誌

美学	1(昭 25)－42(平 4)＋
美術研究	1(昭 7)－348(平 2), 352(1992.2)＋
文学語学	1(昭 31)－118(昭 63), 134(平 4)＋
文化人類学	1(昭 60)－8(平 2)＋
地方史研究	42(平 4)＋
英語教育	1(昭 27)－40(平 3)＋
英語展望	1(昭 36)－96(平 3)＋
現代英語教育	1(昭 39)－29(平 4)＋
悲劇　喜劇	45(平 4)＋
比較文学	1(昭 33)－33(平 3)＋
比較文学研究	61(平 4)＋
イメージフォーラム	143(平 4)－151(1992)＋
計量国語学	18(6)　(平 4)＋
古文書研究	35(平 3)＋
国語学	1(昭 23)－165(平 3), 169(平 4)＋
国語国文	1(昭 6)－61(平 4)＋
訓点語と訓点資料	88(平 4)＋
民族学研究	57(平 4)＋
日本文学	41(平 4)＋
日本学	1(昭 56)－19(平 4)＋
日本語教育	77(平 4)＋
セサミストリート	4(10)(平 4)＋
Trends	22(1)(平 4)＋
早稲田文学［第二次］	1(明 39)－10(大 5)
早稲田文学［第八次］	176(平 3)－196(平 4)＋
Canadian Modern Language Review	48(1991/92)＋
Comparative Education Review	36(1992)＋
Comparative Literature	44(1992)＋
English Today	2(April 1985)－12(1987); 4(1988)－8(1992)＋
Foreign Language Annals	1(1967/68)－24(1991), 26(1993)＋
Harward Theological Review	84(1991)＋
Journal of Asian Studies	51(1992)＋
Journal of Biological Chemistry	267(1992)＋
Journal of Religion	72(1992)＋
Journal of Theological Studies	43(1992)＋
Language	1(1925)－38, 68(1992)＋
Language Learning	1(1948)－36, 42(1992)＋
Language Teaching	1(1968)－26(1993)＋
Literature & Theology	6(1992)－7(1993)＋
Modern Language Journal	30(1946)－76(1992)＋
Nature	291(1981)－360(1992)＋
Philosophy & Literature	16(1992)＋
Proceedings of the National Academy of Science of the United States of America	89(1992)＋
Studies in Language	1(1977)－16(1992)＋
TDR;The Drama Rexiew	36(1992)＋
TESOL, Quaterly	26(1992)＋
Transactions of Philological Society	90(1992)＋
Transition An International Review	55(1992)＋
World Literature Today	66(1992)＋

気楽に読もう――②

『空飛び猫』

アーシュラ・K・ル＝グウィン著　村上春樹訳
（講談社）

作者はあの「ゲド戦記」のアーシュラ・K・ル＝グウィン、訳者は村上春樹、そして主人公は翼のはえた4匹の子猫と聞いただけで読みたくなったでしょ。

それでもまだその気にならない人、表紙の絵を見てください。絶対読みたくなるはずです。かわいんだなーこれが。

なんだか辛い事ばかり、なんて嘆いている君、声を出して読んでください。穏やかな気持ちに絶対なれます。村上春樹の優しさが伝わる日本語に私までが優しい気持ちになりました。人間もまだまだ捨てたもんじゃないよって頑張れそうな気になりました。

こんなに素敵な本なのに残念ながら本館には所蔵していません。

でもどーしても、大勢の人に読んでもらいたい本です。

「ゲド戦記」については、Oさんが、詳しく紹介しています。あわせて読むと、すっかりアーシュラ・K・ル＝グウィンの世界に、はまってしまうかもね。　(M)

新着図書 ――工学部

BF 集密書庫

ソフトウェア取引の実務　法律・会計・税務のすべて　朝日新和会計社編　1992

データベース設計入門　利用者の立場から　藤田節子著　1992

パソコン・一太郎使う前に読む本　市川昌浩、松岡裕典著　1992

ユーザーのためのUNIX利用の手引　小関祐二著　1992

MS-DOSをマウス対応にする本　いつでも、どこでもマウス中毒　唯樹貴希著　1992

ディスプレイを楽しく遊ぶ本　「画面の焼き付き」を防止して　唯樹貴希著　1992

(入門) 仮想EMS & RAMボード　岡田勝由著　1992

マインズ・アイ・コンピュータ時代の「心」と「私」　上・下　D.R.ホフスタッター、D.C.デネット編著　1992

工業簿記の学び方　斎藤克、鈴木昇共著　1992

先生のための一太郎　日向野一生編著　1991

大学を問う　荒廃する現場からの報告　産経新聞社会部編著　1992

宇宙は語りつくされたか？　アインシュタインからホーキングへ　アラン・ライトマン著　1992

ヒューマンインタフェース　大須賀節雄編　1992

問われる建設省　全建設省労働組合編　1992

最新道路ハンドブック―調査・計画・設計・施工・管理のための―　道路ハンドブック編集委員会編　1992

河川工学　高橋裕著　1990

海岸工学用語集　「和英対照付」「シソーラス付」　土木学会海岸工学委員会編　1992

これからの廃棄物処理と地球環境　石川禎昭著　1992

不滅の建築　1―12　鈴木嘉吉、工藤圭章責任編集　1986

地下都市は可能か　平井堯編著　1991

地球を救え　ジョナサン・ポリット編　1991

ポッロミーニ　G.C.アルガン著　1992

パソコン建築CADの実際　井上国博、本間久里子共著　1992

都市・空間・建築の根拠をさぐる―空間の存在論へ　文化科学高等研究院(EHESC)　都市文化科学研究センター編　1991

基礎過渡現象　本郷忠敬著　1992

コミュニケーションの科学　マルチメディア社会の基礎理論　E.M.ロジャーズ著　1992

波動工学　早川正士著　1992

図解ディジタルオーディオ読本　中島平太郎編著　1992

UNIXワークステーションNEWS　民田雅人［ほか］共著　1991

図解超並列コンピュータ入門　村岡洋一、山名早人共著　1992

フォールトトレラントコンピュータ　南谷崇氏　1991

気楽に読もう――③

『新・100億年をかける宇宙』

加藤万里子著　(恒星社)

始めは参与図書として拾い読みをしていたのだが、そのうちにそれを忘れてのめり込んでしまう程面白かった。p 200弱で6章に分かれており、セクションも細かいので非常に読みやすい。

大方の天文書は物理学の知識を多様するらしいが、この本は数式を省き、物理法則を用いた上で宇宙の成り立ちなどを解かりやすく説明している。

又、天体だけでは無く人類のルーツ等についても書かれているし、グラフや絵、写真なども数多く掲載されていた。但しカラーでないところが難点かも知れない。

教養程度に一度手に取ってみることをお薦めします。　(経営学科1年　Y.Y)

書　庫

教養部――新着図書

パスカルの人間観　天使でもなければ、野獣でもない　児玉正幸著　1992

中世の夢　ジャック・ルゴフ著　1992

イギリス祭事・民俗事典　シャールズ・カイトリー著　1992

春から秋・滝を訪ねる旅　北海道ゆうゆう紀行　山谷正著　1992

たったひとりでクリルの島へ　ホームステイでサハリン、北方領土を行く　浅井淳孤著　1992

日本見聞録　こんなにちがう日本と中国　李国棟著　1992

日本進化論　いま考える明日の日本　西川太一郎編著　1992

不信から信頼へ　北方領土交渉の内幕　アレクサンドル・パノフ著　1992

核拡散とプルトニウム　石田裕貴夫著　1992

国際平和維持活動　PKOのためのマニュアル　松村劭著　1992

黄金の果実　青年海外協力隊奮戦記　大蔵省印刷局編　1992

変革日本型経営　グローバル時代の生き残り戦略　松田修一著　1992

日本企業の国際経営　吉原英樹編著　1992

説得術　福田健著　1992

スワップ取引のすべて日本長期信用銀行金融商品開発部編著　1992

EC通貨統合の展望　相沢幸悦編著　1992

異文化とつき合うための心理学　金沢吉展著　1992

聞こえますか？　子どもたちのSOS　保健室からの訴え　富山芙美子［ほか］著　1992

衣裳のフォークロア　P.G.ボガトゥイリョフ著　1981

多次元★球面国　ふくらんだ国のファンタジー　ディオニス・ブルガー著　1992

QOL　全人的医療がめざすもの　永田勝太郎著　1992

生産性向上のための徹底見直し　必ず成功する3つのポイント　中村亘著　1992

リサイクル新時代　環境保全のための循環社会に向けて　環境庁リサイクル研究会編　1991

地球環境問題読本　21世紀を私たちの手に　本谷勲著　1992

宇宙汚染　地球の上空をおおう廃棄物　ジュディ・ドネリイ、サイデル・クレイマー著　1992

侍たちの北海道開拓　榎本守恵著　1993

英語通訳ガイド試験における単語・語法の徹底的研究　山口百々男［ほか］著　1992

米国メディア戦争最前線　全米TV界制覇戦略　アレックス・ベン・ブロック［著］　1991

言葉のゆくえ　明治二〇年代の文学　谷川恵一著　1993

外資系企業崩壊す　国際弁護士の事件簿　松尾翼著　1992

気楽に読もう――④

『森から来た魚―襟裳岬に緑が戻った―』

相神達夫著　（北海道新聞社）

「魚付き林」とは、海岸林や河川地域の豊かな森林の栄養が魚を養うという、江戸時代からわが国の漁村に伝わる考え方である。ところが、豊かな森林に恵まれた北海道も、江戸時代からの伐採のため各所で森林の荒廃を招き、「魚付き林」が失われていく。

襟裳岬でも、昭和の初めに緑豊かな広葉樹林が姿を消し、「えりも砂漠」と呼ばれる荒んだ光景が出現する。また砂漠化とともに、流出土砂のため海は赤く濁り、魚は去り、特産の昆布も質量ともに低下するなど、漁村の生活自体も崩壊していく。

こうした事態を憂い、昭和28年から緑化事業が開始されるが、海から来る強風のなかでは草地の形成すら大変な努力を要するものであった。40年を経た現在、ようやく砂漠の7割でクロマツなどの植林が成功した段階であり、昔のような広葉樹林を再現するにはまだかなりの時間を要するようである。

本書は、厳しい自然のなかでの緑化事業を克明に記録することで、一度失われた自然を回復するために、人間がいかに大きな犠牲を強いられるかを教えてくれる。一つ身近なところから、環境問題について考えてみてはいかがでしょうか。

（人文学部N）

英語つれづれ譚

◉日本語の輸出◉

河井達雄

「浜までは海女も蓑きる時雨かな」　瓢水

このユーモア溢れる情景に出てくる海女も、英語 ama になったと知って驚くに違いない。

日本国が国際社会に評価され、重要な影響力を持つにつれて、日本語は海外に出ていく。英語になった日本語を調べてみると、どの分野が英語圏に入りこんで行くかが興味深い。意外に不名誉な言葉が海外出張する現象を見ると気恥ずかしい思いがする。

yojinbo(用心棒)、yakuza(やくざ)、ijime(いじめ)、kuromaku(黒幕)、minamata disease(水俣病)、itai-itai disease(痛い痛い病)、kanemi disease(カネミ病)、oyako shinju(親子心中)、などが出てくると寒々とした感じになる。

軍国主義の名残りは、依然として英語の中では消えていない。banzai(萬歳!)、kamikaze(神風)、harakiri(腹切り)、hancho(班長)など、第二次世界大戦の爪跡が生々しく英語の中に生き残っている。

当世の日本国の教育事情を反映して、juku(塾)が英語になっている。塾を色々英語表現する方法があるが、日本方式の塾は外国にないので、juku と言うより他に述はない。

まさかと思われるのが、澄まして英語になっているのは、凄く面白い。日本固有的なもの、真底日本風(ジャパネスク)なものであるから、英訳にならないのであろう。hibachi(火鉢)、origami(折紙)、shibui(渋い)、moxa(艾(もぐさ))、giri(義理)など。そのうち、人情、おとしまえ、地あげ、ジャパ行き、などが英語に採択される日がくるかもしれない。

ハイテク商品名として、ウォークマン (walkman) が英文の中々に登場している。大学入試にオートメーカー (auto-maker) が出ていたが、まだ英語としては新語の部類に属するものであり、日本市販の英和辞典には、極く少数しか記載されていない。オートメーカーは英語本来の感覚では、車の修理工場ていどの意味なのだが、英文中では、明らかに、トヨタ、日産、GM などを指している。日本人の車デーラーや製造業者が、オートメーカーと頻繁に用いる余り、英語圏で採択されたのではないかと感ぐるのである。

望ましいのは、良い意味での日本語を輸出して欲しいことである。恥辱的な日本語が外国語の中に居座っていることは、日本の国内事情の欠陥を暴露していることになる。

注　gaijin(外人)も外国人にとって不愉快な日本語として、英語として成立する日も、そう遠くはない

(かわい　たつお　元北海高校教諭)

気楽に読もう―⑤

『メメント・モリ』

藤原新也著　(情報センター出版局)

ハマりそうでマズイと思い、なんとなく遠ざけている作家はいないだろうか。分裂質の連中はハマることすら知らずにハマっているからいいようなものの、私のように躁鬱質の深みを避けてチョイチョイチョイと生きたがる人間にとっては、ハマってしまうことに一抹の不安を覚えてしまうのだ。しかしその危機感にもかかわらず、思わず脳ミソを半分持っていかれたような作家に、藤原新也がいる。「ちょっとそこのあんた、顔がないですよ」と強烈な文字のカウンターで始まるこの写真付書物の第一印象は、ふと思うに、いつぞやの中島みゆきのレコードの出だしを彷彿させる。つまりタダモノではない。ガンジスの岸辺で焼かれる人間の死体やその一部を食っている野良犬の写真もあるが、ムムッと意識を停滞させる私の凡々たる次元を著者は遥かに越えて、写真の横に大きな文字で一文こう記してある。「ニンゲンは犬に食われるほど自由だ。」どうですか。特に躁鬱質の活字愛好者には要注意の一冊だと思いますが。(K)

卵のままで……3年間

国税専門官試験に合格し、最初の3カ月の研修(基礎研修)をなんとか無事に終わると、もう6月末です。各地の税務署へ配属が決まる頃、不思議とみんなの顔は、社会人の顔になっています。3カ月間の研修中に身につくものは、どうやら税法ではなく、(もちろん中には、きちんと税法と会計学を身につけることのできた人もいますが) この〝社会人の顔〟だったようです。

修了式のあとには「3年したら (専科研修で) 会おう」「それまで元気で」という声があちこちで聞かれます。『3年したら』を合言葉に全国へ散っていくのです。

ピカピカの税務職員の卵たちは、夢の研修(だったとあとから思うのですが) から、超現実へと放り出されます。そこでは職場の先輩、上司たちの優しい指導のもとで、実にさまざまな人達 (納税者や税理士など) と出会うわけです。怒鳴られ、励まされ、けなされ、笑われ、勇気づけられます。どの仕事でもそうですが、新人さんにとって大の苦手といえば、電話に出ることではないでしょうか。ましてこの電話の相手がはじめから喧嘩腰だったとしたら!? 税務署は警察より嫌いだと言う人が結構います。なぜなら、警察は交通事故の時か、自分が悪いことをした時にだけ世話になるところだけれど、税務署は何にも自分で悪いことをしていなくても向こうからやってくるからということです。ところが、ピカピカの税務職員の卵たちにとって、鬼より恐いのは納税者だったりするわけです。

失敗と反省を繰り返し、少しずつ経験と自信を身につけていく3年間。つらい時思い出すのは、あともう少ししたら (専科) 研修で、また同期のみんなと一緒に勉強できるということです。もう少し頑張ってみようという気になるのです。この2度目の研修の半年間は、ひとつの節目、つまり卵をひよこに孵(かえ)す時期とみられています。職場の中にそういう雰囲気があり、その時を待っているわけです。2回目の研修では、ひよこになるための生みの苦しみが待つことも知らず、卵たちは卵のままで3年間過ごすのでした。 (O)

気楽に読もう—⑥

『地球の歩き方』

'91～'92版　ボストン(63)USA編
(ダイヤモンド社)

アメリカ大陸発祥地、ボストン、ニューイングランド地方、保守的と云われる其の中で、最高級ホテルの営業部、アジアマーケット部長として、忙しく働いて居た頃、この高級ホテルにまったく不釣合いな大きなバックパックにカメラを抱えスニカーをはいた女性が突然私の前に立っておりました。「あ～あの地球の迷い方の編集の方ですね」と云われ、恥かしそうにしていたのが、山本玲子女史でした。彼女は大変熱心で大変なハードスケジュールで、日本女性もこんなにプロフェッショナルになって来たと私は期待したものでした。13年間の滞米生活を終えて日本へ戻り、再度手にとってみた「地球の歩き方」は良く調べて、ほんとうに正確になって居り、又自分のことが載っているのをみて、今度は私の方が照れたりして居ります。アメリカに住んでいた頃にアメリカ人はもとより世界各国の人々と友人になりました。学生・教職員の皆さん、「地球の歩き方」を抱えて、アメリカ、ヨーロッパ等、各国へ**旅してはいかが**でしょう。

(H.takeuchi　元スイスホテル営業部長ボストンUSA)

外国人から見た日本語 ── その2

── 日本語のコミュニケーション ──

中川 かず子

最近、外国人のための日本語教科書にいわゆる「のだ文」が多く見られる。「のだ文」とは、「どうしたんですか」や「具合いが悪いの」の例にある、助詞「の」が動詞や形容詞や名詞の活用形の後についた文のことである。「のだ文」が日本語教科書に現れるようになったのは70年代に入ってからで、それも「実は～の（ん）です」とか「それで～なのです」のように、ある事柄の理由を説明する用法が主流であった。当時中級教科書での学習が一般的であったが、'70年代後半からは初級学習者にも導入されるようになった。「ありません」しか学習していない初級学習者に「ないんです」を教えるのは大変だったと思われるが、それでも「の」の用法が「理由などの説明」に限定されていただけ、教師は救われたはずである。その頃、腕や足に包帯を巻きつけて教室に向かう教師をよく見かけたが、学生達を驚かせ、理由を求めたり説明する「のだ文」を発話させようという教師の努力を見る思いがした。

この「のだ文」であるが、「どうしたの」に対する「転んだんです」の「の」はいいとしても、最近の教科書によくある、用件切り出し表現としての「ちょっと伺いたいんですが」や「お出かけ？」に反応する「ええ、会議なんです」の「の」などは、「説明」だけでは意味を十分説明しきれなく、外国人学習者を戸惑わせることも多い。

外国人には、日本語の話し手の発話意図が何で、聞き手に対してどんな反応や返事を期待しているかが見えにくい。例えば、「あら、もうできたの」と声をかけられた場合、日本語をよく知らない外国人は「はい、(そうです)」という返事だけで会話を終えてしまう。日本語としては間違いでないのに、何故か物足りなさが感じられる。日本人ならば、多くの場合、「～さんに手伝って頂いたので」とか「割と簡単だったんです」などの「早くできた」理由を自主的に述べて、相手の意図を汲み取ろうとするだろう。あるいは、「ええ、なんとか」、「一応……」などのように余韻を残して相手の次の反応を待つこともある。つまり、「もうできたの」は単に事柄の完了を尋ねているのではなく、「できた」ことに対する聞き手への確認であり、時に話し手の驚きや意外な気持が込められる。そんな時、聞き手は話し手の意図を汲んで疑問に答えるべく説明したり、言い切りの形にせずに相手の反応を待つことで会話を円滑に進めようとするのではないか。よく話し上手は聞き上手というが、日本語でのコミュニケーションの場合、特に話し手は聞き手の意識を理解しようという姿勢を示すのが普通である。「のだ文」や終助詞「ね」を含む文が会話文で頻繁に用いられるのは、それらが話し手の意識を聞き手に確認する機能を有し、その結果、話し手と聞き手の共通の意識や感情が会話を円滑に運んでくれるからである。先ほども例に挙げたが、日常生活でよく聞かれる「お出かけ？」、「お仕事？」という問いかけへの答えは外国人にとって易しくはないようだ。説明しすぎて笑われたり、「そうです」とだけで答えて「冷たい人」と思われた人もいる。その時、「そうなんです」、「この頃休めなくて」等々、自分の行動の背景を説明することで相手との情報の溝が埋まり共感が得られる。また、「早くから大変ですね」のような「ね」の問いかけ文も、「仕事なんです」と「のだ文」で答えることができる。

日本語でのコミュニケーションは、外からは歯がゆく映るようだ。日本語の会話の仕方は日本人の発想や行動様式と切り離して考えられない。時に自らの日本語を見つめ直し、その裏に潜む考え方を探ってみてはいかがだろうか。

（なかがわ　かずこ　人文学部教授）

北海学園大学附属図書館報　図書館だより Vol.15　No. 2（通巻126号）
本館　〒062　札幌市豊平区旭町4丁目1番40号　工学部図書室　〒064　札幌市中央区南26条西11丁目
☎（011）841－1161　本館内線　270～275・279　工学部内線　813・814　印刷所：㈱アイワード